

「最も小さい者の一人に」

(マタイによる福音書 25:31-46)

教会の暦は最後の主日を迎えました。今日は「王なるキリスト」の主日とも言われます。今日の福音で主イエスは、ご自分のことを「最も小さい者」だと仰います。王様らしからぬ話しです。しかし、これがとても大事なことです。わたしたちは今日、あらためてわたしたちの王の姿を見つめ直しましょう。

「最も小さい者」とは誰でしょう。今日の福音では、それは「飢え、のどが渇き、旅をし、裸で、病気で、牢屋にいる」人のことです。主イエスはまさに毎日こういう人のところへ出かけて行き、苦しみを共に担い、その命を回復されました。主イエスは、「最も小さい者」をご自分のことだと仰っているように、それらの人々と一緒になり、痛みも、悲しみも、喜びも、その命のすべてを分かち合われました。これがわたしたちの王の姿です。この王様はどこか遠くにいて偉そうにしているのではなく、近くで寄り添ってくれる王様です。わたしたちクリスチャンは、この主イエスに倣い、日々において「最も小さい者」と出会うことが求められています。

けれども、「最も小さい者」とは、社会を俯瞰して「ああ、あの人だ」と、対象化できるものではありません。それは出会って行くしかないのです。その出会いとは、ただひたすら目の前の相手を神さまが遣わされた方だと認めて、共に生きようとすることによってしか起こりません。そうして、今、目の前にいる人と関係する。するとさらに出会いが与えられて「最も小さな者」へと導かれていく。だからこそ、目の前の出会いが神によって起こされたこと、目の前の人が神から遣わされた人なのだとして出会うことが、まず大切わたしたちの基本姿勢です。

主イエスのこの世でのお働きがまさにそういうものでした。異邦人でも、女性でも、こどもでも、その出会いとその命を大切にされたのが主イエスです。その噂を聞きつけた人々が、また主イエスのところへと病人や悪霊に取りつかれたとされる人を連れてくる。そうして主イエスは目の前の人と関わることから、小さな者と次々に出会いました。今日の福音で主イエスはその人々とご自分の命はまったく同じだと言われています。自分もあなたも、神さまから与えられた大切な命、存在なのだと主イエスは言われたのです。それがわたしたちの王なるキリストです。本当に良い王様です。わたしたちも見習わなければなりません。

聖書を見返すと、あることに気付かされます。それは、小さなものを通してこそ福音は語られる、ということです。福音はベツレヘムという「小さな町」で生まれた「小さな赤子」によって明らかにされ、天の国は少年が差し出したわずかなパンによってわたしたちに現されます。他でもない、ご自分を最も小さな者と言われる主イエスは小さくされた命とともにおられる。だからもしも、わたしたちが小さなものを見失っているならば、わたしたちは福音から離れている、イエスさまから離れていることにほかならないのです。だからこそ主イエスは空の鳥、野の花を見なさいと、小さなものを指差し、あの小さなものを見つめ続けなさい、その視点を失わないように目を覚ましていなさいと言われるのです。小さな命と生きることこそ、福音と共に生きることだからです。

今日の福音で見逃してはならないのは、「正しい人たちが」、自分のしたことに気付いていない、ということです。「正しい」とされた人びとは自分の利益を考えていないのです。自分の利益のために誰かにやさしくしたって、それは神が求めていることではないのです。大切なのは、どのよ

うな人間であれ、わたしたちが日々出会う目の前の人間が主イエスと同じ大切な命を与えられた人なのだ、神が遣わされた人なのだということを忘れずに、忠実に、誠実に関わろうとすることです。ただ単純に、日々の営みの中で「やさしさ」をもって目の前の人と関われることを願いましょう。

わたしたちの王様は、小さな赤子としてお生まれになり、最も小さな者でご自分を一緒にされ、最も小さな命として、わたしたちのために死んでくださった王様です。神さまはその小さな命をこそ復活させられました。わたしたちの王様はそうして、小さくされた命にこそ神さまのみ心が注がれていることをわたしたちに示してくださいました。今日あらためて、王なるキリストが指し示す小さなものへの眼差しをいただきましょう。そこからわたしたちの歩みははじまります。そして歩み新たに、来るべき降臨節を迎えましょう。